

今こそ、「くぐらせ期」の実践を子どもたちに・・・

「くぐらせ期」のかな文字指導の実践事例

1977年から実施され、まとめられた「部落解放白書」では、小学校入学数か月の時点での部落の子どもたちのさまざまな発達上の問題点を指摘し、本来発達すべき諸能力が阻害されていることが明らかにされました。これらの現実を、部落差別の結果と捉える中で、就学前「同和」教育は出発したのです。

2000年度、県就同研研究会の参加者から「小学1年生がとにかく話が聞けない、席に着かない、勝手に教室を飛び出す。『ほんとに最近1年生たいへんよね。』と何人もの1・2年担任から聞く。」という声が出されました。

これを受けて、こうした子どもをめぐる状況をいち早く捉え、すでに取り組みの始まっていた大阪から講師を招き、『小1プロブレム』は、幼児期を十分、生ききれてこなかった、幼児期を引きずっている子どもたちが引き起こす問題である。群れあそびやけんかなど、人間関係を学ぶ体験やさまざまな生活経験の不足は、結果として子どもたちが自己の欲求と他者との関係に折り合いをつけていくことや、なかま意識を築いていくことを阻害していく。『小1プロブレム』は、集団を形作れない『学級未形成』の問題なのだ。」という提起を受けました。

子どもをとりまく環境の変化（社会や子育ての変化）の中で「そだち」を奪われている姿が、「小1プロブレム」だとすれば、「進路保障の入り口である就学前と義務教育のスタートを段差なく、なだらかにつなぐ」ためにこれを克服しなくてはならない。

そもそも、就学前の6年間では子どもたちの育った生活環境、言語環境、活動体験は様々です。そのくらしの中で子どもたちは「ことば」を学び、経験を重ねていきます。それこそが子どもたちが現時点で身につけている生きる力なのです。

しかし、こういった力が必ずしもすべての子どもたちに保障されているわけではなく、すべての子どもたちが同じスタートラインにたっているのではないのです。だからこそ、入学まで通過してきたであろう道筋をもう一度、共にくぐらせたいのです。

その具体的な取り組みとして、これまで熊本県人教は「くぐらせ期」を提起してきました。「くぐらせ期」のかな文字指導は、こまやかに教材を用意しながら、からだところをひらくことを基本に、子ども一人ひとりのくらしと重ねながらすすめていきます。

熊本県人教「就学前教育」研究のまとめ（2003~2005年度）掲載の実践例を集め、本冊子を発行いたします。その実践の魅力を感じていただき、学校現場での実践の参考になれば、幸いです。

今後、みなさまの実践を熊本県人教まで、届けていただきその内容をさらに充実したものにしたいと考えています。

【実践事例 1】

くぐらせ期のかな文字指導

1 はじめに

1 年生入学。同じスタートラインに立ったように思われる子どもたちであるが、ひとりひとりのそれまでのくらしや生活経験には大きな違いがある。だからこそくぐらせ期のかな文字指導にこだわりたいと三人で話し合った。単なる文字指導ではなく、くらしや遊びを通して生きた文字の獲得をめざしたいと思った。そのことが、しなやかなところとからだを育て、差別をはね返していくにんげんに育っていってくれるとの展望をもっている。

2 具体的実践例

① 「ぬ」の授業

花壇に水を張り、どろ遊び。ぬちゃぬちゃ、ぬるぬる、ぬめぬめ、手先や足の裏、体全体で感じた。ホースの水で体を流すと「キャー。」と歓声上がる。

あきは入学当初、ひとをたたいたり蹴ったり、きずつくことばを言ったりすることでしか、かかわりを持てずにいた。そんなとき、話をしても決して目を合わせようとしなかった。「どうせぼくは・・・」と言うことが多かった。あきの言動一つ一つを叱ったり、注意することしかない担任に心をひらくはずはないと思った。そのあきが目を輝かせる時間が国語の授業だった。

ある日の「ぬ」の授業。ぬるぬる、ぬちゃぬちゃの「ぬ」。まだ何も植えていない花壇に水を張って土の感触を味わった。「今日は泥だらけになっていいんだよね。」「着替えがあるから大丈夫だよね。」と張り切っている。虫に興味があるあきは、授業中必ずといっていいほど虫を手握っていた。そんなあきが泥だらけになることも楽しみにしていた。泥の中に入るのを躊躇する子どももいた。あきは所狭しと走り回っていた。「見て見て、こんなに汚れたよ。泥って気持ちいいね。」と泥だらけになったからだを自慢していた。「今日の勉強はあきら君が一番がんばったね。」と言うと、「ほんと？ぼくが一番？」と笑顔だった。

次の日の連絡帳に『ぼくが一番だって誉めてもらったよ』と学習の様子を楽しそうに話してくれた。あきが楽しく参加できる授業でうれしいです。」と書かれていた。叱られることが多くて「またあきらくんが・・・。」と子どもたちからも言われていた。自尊心をなくさせているのではと思っていたので、あきの活躍する場面や笑顔を見られたのはよかったと思う。

② 「そ」の授業

妙泉寺公園に出かけてダンボールを使ってそり遊び。

「お友だちができるでしょうか。先生にご迷惑ばかりかけるかもしれません。」と両親は心配していた。おしゃべりが大好きなみのりだが、保育園では友だちがいなかった。入学してからもひとりで遊ぶことが多かった。クラスのなかまとかかわりを持てる場をつくりたいと思った。

そり遊びの「そ」で学習した。妙泉寺公園まで出かけ、二人組ですべるようにした。「な

おきくん、いっしょにやろう。」と自分から声をかける友だちの名前もだんだん多くなってきた。友だちと活動することを楽しむようになり、「今日は何の勉強かなあ。」といった意欲も持てるようになった。

そんなみのりが「お勉強は苦手です。お勉強するとエネルギーがなくなります。」と訴えるときがある。読む力、書く力をもっとつけたいと気負う担任とみのりの気持ちとのすれ違いがある。あせる担任にみのりがブレーキをかけてくれる。

③ 「く」の授業

☑るまいす体験。運動場に大きく書いた「く」の字の上を車椅子に乗って、友だちに押しでもらったり、押しあげたりした。

ひかるは生活科の時間などで校外学習に出る際は車いすを使うようにしている。歩いて行けない訳ではないが、行った先での活動を保障するためにそうしている。「どうしてひかるくんは車いすで行くと？」と、途中である子が聞いてくる。ひかるは黙っている。「いいなあ、ひかるくんだけ。」「押させて、押させて。」「ぼくにも押させて！」そんな声がひかるを取り巻く。

「く」の学習で車いすを使うことにした。運動場に「く」の文字を大きく書き、その上をなぞる。車いすののって押ししてもらい、交代でやる。車いすは町の福祉協議会から10台ほど借用した。

ちいさい子どもたちにとって、なぞって押すのは思ったより難しいようだった。また、乗り降りするときはしっかり持っていないと乗っている子が転びそうにもなった。車いすってどんなものかという学習をした。ひかるも楽しそうにゆっくり押していた。

④ 「う」の授業

☑るとらまんの人形を使った。☑るとらじゃんけんをしながらところをほぐす。筆順の確認。

①あか ②あお ③き ④みどり

保育園からの引継ぎでも、あすかは気になる子どもだった。「保育園は休みがち」「保護者との連絡がとりにくい」「発達に遅れがある」など。

入学式の日から、あすかの落ち着いた様子が目立った。鉛筆やクレヨンを持てばなぐりがきのような状態だった。くりくりの目で元気いっぱい、話したがりのあすか。しかし、文字の獲得には困難が予想された。あすかが楽しく参加できる授業にしたいと思った。

一番初めに学習したのは「う」。まだまだ緊張している子どもたちに、笑いや遊びがあり、ところがほぐれる授業にしたかった。あれこれ考えてウルトラマンじゃんけんをすることにした。うるとらまんの「う」。

「きょうは1年生になったみんなの応援に来てくれた人がいます。」そう言ってウルトラマンの人形を取り出すと、それだけで子どもたちの歓声が上がった。「わあ、ウルトラマンだ。」「タロウだ、タロウだよ。」あすかも身を乗り出して見ている。

「じゃあ、ウルトラマンじゃんけんをするよ。」リズムにあわせて体全体を動かすこのじゃんけん遊びはつるまき体操にも通じるものがあって、子どもたちは笑顔でいっぱいだった。あすかはヒーローになりきってポーズしていた。こちらが設定した場面に素直に入ってきて、からだで表現できるあすかのよさを発見した。

ひとしきり遊んだあと、いよいよ鉛筆を持って「う」の練習。「ウルトラマンがみているからね。」のひと言で「ようし、がんばるぞ。」とこたえてくれるあすかだった。

⑤ 「け」の授業

新聞紙を丸めたり、ひもで結んだりして団だま作り。

かな文字指導をしていくときに、子どもたちの経験を豊かにしたいという願いがある。「け」の授業では新聞紙とひもを使ってけんだま作りをした。新聞紙をしっかり丸めて棒状にする。二本をひもで十字に縛ってけんだまのもち手を作る。同じように棒状の新聞紙を今度は輪にして玉の代わりにする。二つをひもでつないで出来上がり。新聞紙を丸めることも、ひもを結ぶこともあすかには難しそうだった。しかし、手先を動かすことを経験させたかったし、身近な材料が遊び道具に変身することも知ってほしかった。実際やってみるとやはり、あすかにとってもほかの子どもたちにとっても難しい作業だった。こんなとき、町から配置されている学習指導補助の先生の存在ありがたい。

3 クラス合同での作業だったので大賑わいの中、補助の先生たちの手助けや子どもたちどうしの教えあいで全員のけんだまが完成した。自分ひとりでできないとき「教えてください。」「手伝ってください。」「頼めるのも大事な力だと思う。あすかは補助の先生に頼むのがとても上手だ。出来上がると「見て、見て。」「先生、入れきったよ。」「今日、もって帰っていいね。」と喜ぶ子どもたちだった。授業後、新聞紙をさらに細く巻き、剣にしたりして遊ぶ姿も見られた。

3 おわりに

あきは最近表情がやわらかくなった。休み時間にたくさんの友だちと遊ぶ姿をよく見かける。自分の気持ちをことばで表現できるようになってきた。帰りの会で友だちの名前をたくさん並べて、楽しく遊んだことを発表することが多くなった。帰りの会のとき必ずお絵かきをしていた頃もあった。今ではしっかり顔を上げている。

「今日はぼくが日直ですから。」と朝から誰にでも話しかけているみのり。みんなの前に立って、朝の会、帰りの会を進行するのを毎回楽しみにしている。自分に自信が持てるようになってきた。班のなかまと活動するときも笑顔が見られるようになってきた。

ひかるのすごいところは何でもやってみるところである。鉄棒もなわとびもまわりが心配しているのとは裏腹に、何とか自分でできる方法でやっている。自分ができる分はやる。最初からできないと決めつけない。そんな姿にこっちが励まされる。2 学期の終わりから生活綴り方に取り組んでいる。自分の家族やくらしのことについてなかなか書かなかったひかるだが、クラスのなかまの綴りに励まされ少しずつくらしを綴るようになってきた。

ひとコマひとコマの授業の積み重ねと補助の先生の粘り強い支援があつて、あすかも1 学期の終わりにはひらがなをどうにか獲得することができた。いくつかの文字を覚えたころ、あすかが自分の好きな女の子に手紙を書いた。覚えた文字を並べただけの手紙だったので意味はわからなかったが、学ぶことの喜びがあふれていた。何のために学ぶのかあすかはしっかりわかっていると感じた。もし、このくぐらせ期のかな文字指導にこだわって取り組まなかったら今のあすかの姿は見られなかったと思う。学級集団のあすかへのかかわり方も厳しいものになっていたかもしれない。次々に出てくるカタカナや漢字の学習に苦勞しながら、またがんばっているあすかである。

《資料1》

1年〇組 国語科学習授業案

1 題材名 「ことばであそぼう」 —— 「ひ」の授業 ——

2 題材について

本題材は、ことば遊びをしながら、文字やことばに慣れ親しむためのものである。

しかし、就学前の6年間では子どもたちの育った環境、言語環境、活動体験はさまざまである。そんなさまざまなからしの中で子どもたちは「ことば」を学び、生活経験を重ねていく。その生活経験こそが子どもたちの生きる力へとつながっていく。自分の要求を出したり、相手の気持ちを考えたり、身近にあるものや道具を使って遊んできたりしてきたことは、入学したばかりの教室の中でのおしゃべりや絵本読み、声の大きさ、聞くこと、話すこと、書く(描く)こと、はさみの使い方、紙の折り方などにつながる。

このような生きる力のもとが必ずしもすべての子どもたちに保障されているわけではない。からだ(表情や心も含む)のしなやかさ、手のしなやかさが保障されなかった子どももいる。すべての子どもが同じスタートラインに立っているわけではない。だからこそ、入学までに通過してきたであろう道筋をもう一度、共にくぐらせたい。そんな思いから入門期の読み書きの指導はこまやかに教材を用意しながら体と心をひらくことを基本にして、できるかぎり子どもたちのくらしと重ねながらすすめていく。授業をすすめていく上で以下のような子どもたちが課題を提起してくれる。

～ 以下 略 ～

3 題材の目標

ことば遊びを楽しみながら、ひらがなを読んだり書いたりする。

4 単元計画と評価の規準

次	時	学習課題	学習内容	評価の基準
一	2	しりとり遊びをする。 ことばをひらがなで書く。	・しりとり遊び方を知る。 ・「ひ」ではじまることばがいろいろあることを知る。	○しりとり遊びの仕方がわかる。 ○ひらがなの中のある文字がつくことばをいろいろ考える。
二	1	ことばのパズルの空いているところに文字を当てはめる。	・ことばのパズルをする。	○パズルに当てはまることばを考え、ひらがなを書く。

5 本時の学習

(1) 本時の目標

- ・しりとり方法がわかり、遊ぶ。
- ・「ひ」のつくことばを集める。
- ・ひらがなの「ひ」を正しく書く。

(2) 展 開

学習活動	時間	教師の支援	評価
1 「こぶた、たぬき、きつね、ねこ」を歌い、しりとりのでやりかたに気づく。	5	板書をし、しりとりのでやりかたがわかるようにする。	
2 しりとり遊びをする。 教師—児童 児童—児童	10	教師と児童とが交互にやって、やりかたがわかったところで児童同士の遊びにつなぐ。 「はっきり話そう。」 「わからないときはいっしょに考えよう。」	しりとり遊びをしているか。
3 「あさひ」の出題から「ひ」のつくことばをみつめる。	5	ひらがなの特徴である音をあらわすことを感じ取らせる。 「ひ」から始まることばばかりでなく、間に「ひ」が入ることばにも発展する。	「ひ」のつくことばを考えているか。
4 本時はひもの「ひ」で学習することを知らせ、ひもの結び方の練習をする。	10	大きいひもでやって見せる。 説明をきちんと聞かせる。 子ども同士で教えあうことも大事なことを伝える。	
5 ひもで「ひ」の形を作る。	5	字形に注意させる。 形ができたなら、なぞらせる。	正しく書けているか。
6 「ひ」を書いて練習する。	10	曲がりや折り返しに特に気をつけさせる。	

《資料2》

かな文字指導例（取り扱い順）

「う」・・・うるとらまんの人形を使った。うるとらじゃんけんをしながらころをほぐす。筆順の確認。①あか ②あお ③き ④みどり

「い」・・・「こんないえにすんでみたいな。」家の絵のプリントに自由な想像で自分の家を描く。好きな色をつける。

「え」・・・みついしえきにいき、電車を見る。「どっちから電車が来るかな。」

「あ」・・・粘土でへびをつくる。長いへび、短いへび、中くらいのへび。手先をしっかりと使って3つのへびであの字形を作る。

「お」・・・おりがみ遊び。おりがみで動物や飛行機をおる。

- 「か」・・・**か**らだで遊ぼう。体や顔をいろいろ動かしたり、あいうえお体操をしたりしてからだところをほぐす。
- 「き」・・・**き**く。耳を澄ませてしっかり聞くと何が聞こえるかな。小鳥のさえずり、となりの二年生の発表の声。飛行機の音・・・。耳を当てて友だちの心臓の音。
- 「く」・・・**く**るまいす体験。運動場に大きく書いた「く」の字の上を車椅子に乗って、友だちに押ししてもらったり、押しあげたりした。
- 「け」・・・新聞紙を丸めたり、ひもで結んだりして**け**んだま作り。
- 「さ」・・・粘土のかたまりの中におはじきをかくして、宝**さ**がし。となりの席の子とさがしっこをして見つけあう。
- 「し」「つ」・・・ストックングに新聞紙ちぎって丸めて詰め込んで**し**っぼづくり。しっぼで「し」「**し**」の形に動かす。お尻にしっぼをつけてしっぼ取りゲーム。
- 「こ」・・・**こ**いのぼりを作り、うろこを自分の好きな色で描く。こいのぼりの歌を歌う。
- 「す」・・・わりばしと綴じひもで**す**の形を作る。ひもで作ると「す」の結びのところがよく分かる。
- 「せ」・・・「**せ**かいのひとつ」の歌を手話をしながら歌う。平和を願う。
- 「そ」・・・妙泉寺公園に出かけてダンボールを使って**そ**り遊び。
- 「た」「と」・・・**た**け**と**んぼをとばす。
- 「ち」・・・学級園のつ**ち**を耕す。土の冷たさ、やわらかさを感じた。
- 「て」・・・ポスターカラーを**て**につけて。みんなで大きな「て」を書いた。手形が重なってきれいな「て」ができた。
- 「な」・・・ばな**な**のかわで「な」の字をつくる。目を閉じて一画ずつ指で**な**ぞる。点字のことも知った。
- 「ね」「わ」「れ」・・・アルミホイルでくしゃくしゃと棒を作って「**ね**」「**わ**」「**れ**」の形を作る。とっても似ている字。「ねわれ三きょうだい」と名づける。
- 「の」・・・「の」の字を**の**りでなぞり、ちり紙をちぎって貼っていく。
- 「ぬ」「め」・・・花壇に水を張り、どろ遊び。**ぬ**ちやぬちや、**ぬ**るぬる、**ぬ**めぬめ、手先や足の裏、体全体で感じた。ホースの水で体を流すと「キャー。」と歓声上がる。
- 「は」・・・魔法使いに枯らされた木に、紙で作った**は**っぱを貼って生き返らせる。
- 「ふ」・・・ふうせん遊び。風船バレーをしたり、お尻で風船を割ったりする。
- 「へ」「り」・・・画用紙を切って折り曲げて、**へ** **り**コプターみたいにまわるおもちゃを作った。飛ばして遊ぶ。
- 「ひ」・・・**ひ**もを使ってひもの結び方の練習。「ひ」の字形をひもでつくった。
- 「ほ」・・・**ほ**しの形をえんぴつで一筆書き。
- 「ま」「や」・・・新聞紙を**ま**るめて、ボールをつくる。バットも作って**ま**きゅうをした。
- 「み」・・・魔法使いの木に今度は**み**（実）をかいて貼る。
- 「む」・・・**む**しとり遊び。
- 「も」・・・糸電話を作るとなりの子に「もしもし。」と電話ごっこ。
- 「ゆ」・・・**ゆ**びにのりをつけて「ゆ」の字を書く。そこにわたをちぎって貼り付けて**ゆ**きみたい。

「よ」・・・習字用紙を指先で「よ」って、こ「よ」りづくり。七夕の飾り付けに使う。

「ら」・・・「ら」ーメン菓子で「ら」の字の形作り。作っては食べ作っては食べる。

「る」「ろ」・・・「る」うそくで「る」「ろ」を書き、えのぐをぬる。絵の具をはじいて字の形が浮かび上がる。

「を」・・・プリントに印刷された大きな「を」の字を筆順どおりに形に気を付けてクレパスでなぞってぬる。くっつきの「を」として使い方を覚える。

「ん」・・・ひらがな全部を勉強したお祝いとして、だ「ん」ごを作って食べる。白玉だんごをみんなで作った。

【実践事例2】

先生、きょうは何をするの？

～「ひらがな」の授業を通して～

体ほぐし・こころほぐし

昨年度まで3年間、同和教育推進教員・人権教育指導教諭ということで、担任しては、なかなか経験できない様々な方々とのつながりや私自身の学びをさせていただくことができました。「保・幼小の連携」について重要性については、ずっと以前からいわれていましたが、これまで担任してきた子どもたちの状況からも強く感じることもあり、何か私にもできることがあればと感じていました。これまでの本校の就学児童に対しての進路保障の取り組みの長い歴史の中で、少しずつ創られていたところはありましたが、このころ同時に加配保育士になられた先生方と色々とお話する中で、保育園側の熱意もあり、保育園の先生に講師をお願いして「つるまき体操」や保育園の取り組みについての研修を校内研修の時間に行うことができ、保・小の連携を1歩前進していくことができました。これまでも小学校の教職員が保育園で子どもたちとふれ合うことはあったものの、保育の中身を知ることはあまりなかったというのが現状でしたし、私自身「つるまき体操」は、実際に体で知ることができていなかったのです。保育園の先生方が子どもたちを知り、子どもたちの心を開いてつないでいこうとしている取り組みは、小学校にもつないでいかなければならないものだと感じていました。

また、他にも、就学前「同和」教育の様々な研究会や学習会に参加させていただく中で、体や心をほぐしていくことと、就学前に子どもたちをつないでいこうとされている先生方の思いや実践をたくさん知ることができました。その中でも小学校に入学後「くぐらせ期」と言われる時期の文字指導のお話をお聞きできた時には、自分が今まで行ってきた文字指導との格差に愕然とし、担任してきた子どもたちの顔が多く浮かびました。子どものくらしや就学前の子どもたちの育ちをあまり考えずに授業を進めてきた私があったからです。これも、小学校の子どもたちには大事にしていかなければならないことでした。

「今年の年長さんは、ちょっと大変ですよ。」

丁寧に取り組みをされている保育園の先生から提起していただき、昨年は何度となく、機会を作って保育園におじゃますることになりました。子どもたちと何度か接していると、「つるまき体操」や「ふれあいのゲーム」になかなか入れない子どもたちや、すぐにけんかを始めてしまう子どもたち、「見て、見て。」と自己主張の強い子ども、保育園に行くことができずにお母さんと一緒にやっとのことで保育園に通っているということで、どこか不安げな子どもと様々な様子を見せてくれていました。保育園との何度かの連絡会の中では、家庭の状況が厳しい子どもも多く、それぞれの先生方が気になっている一人ひとりの詳しい状況と、「なかなか集中してお勉強するのは難しいかもしれません」ということを「ここまで取り組んできたのでよろしくお願いします。色々とお気になっていますが、かわいい子どもたちです。」という期待と愛情を込め、話をさせていただきました。

そんな子どもたちを担当することになった4月。実際に会う子どもたちは、確かに個性的でパワフル。どの子どもにも明らかな課題が見える……。そう感じました。

ひらがなと子どもたち

保育園の先生方から「お勉強はきびしいかもしれません」との引き継ぎと、お聞きした子どもたちの様子から隣のクラスの先生と相談して「ひらがなののであい」を大事にしていこうということを確認しあいました。どの子どもたちも楽しく確実に覚えていける「ひらがな」の学習。「ひらがな」を通して小学校をくぐっていくことができる学習にしたい。そして、1組、2組の子どもたちも確実につながっていけるような学習ということで、二人三脚での「ひらがな」を始めました。

とはいうものの、やはり何かに頼らねば・・・県人教に連絡して資料を送っていただいたのスタートでした。

初めての名前のおきに、さて書けるかなと見ていると、全く書けないという子どもはいないものの、ところどころわからなくて「先生、ゆはどうだっけ?」「さがわからん。」と、戸惑い手を添えて書く子どもも多くいました。また、学習を進めていくうちに、今までにないほどひらがなを読めない・書けない子どもが多いことに気がつきました。でも、ひらがなを始めることを伝えたとき、お勉強に対してはとても興味を示し、がんばろうという態度を全面に出す子どもたちが多く、「1日1字みんなで覚えていこうね」ということでスタートしました。

授業は、教科書のお話を読んだり、考えたりを授業の始めや終わりに入れながら、進めていきました。また、国語以外にも図工、生活科や休み時間、体育や学活とも合わせてやっていました。教科書には突然たくさんの文字が並び、書くことは当然のことながら読みに至っても六人の子どもたちは、読めない字がほとんどという状態でスタートしましたので、その子どもたちにとっても文字の勉強は楽しいと思ってもらえるように展開していこうと話し合っていました。資料からヒントをいただくこともありましたが、ほとんどは「次は何をやるか」と井先生と放課後に肩を寄せ合い話し合ってきました。職員室で行っていたために他の先生方のアイデアやご協力を得ることもできました。一文字一文字に意味を込めて行っていくうちに、字を書くことについてはどの子どもとも興味を持ち、丁寧に書いてくれるようになってきましたし、宿題で必ずひらがなを出していましたが、その文字を並べて二人で「今年の一年生は丁寧に字を書いてくるね。」と自己満足しあうこともありました。

そして、「せんせい、きょうは何すると?」と、楽しみにしている子どもも多く、時には「せんせい、『る』は、ルーレットしたら?」と、私たちが考えたよりもっとすごいアイデアを出してくれる子どもも出てきました。また、「今日は『な』の日だから、なすがでたね。」と、言葉が確実に子どもたちの中に入っていることを感じる事ができました。また、ゆっくりと意味と文字を体や具体物等を用いて学習していったことで、書けなかったし読めなかった子どもたちは、1学期に確実に力をつけたことはうれしいことでした。

ほとんど、字を読むこともなかったこうすけさんも、文字の学習と一緒に文字を覚えていきました。ときどき一緒に字を書いていくと、どれもいつの間にか書けるようになっていました。「け」の字だけ書けないので、どうしたのだろうと思っていると「先生、ぼく、その日お休みした。」ということでした。お母さんと、お話をすると、「前は全く字を読

もうとしなかったんですよ。でも、最近はテレビとかいろんなものの文字を読もうとするんですよ。」とうれしそうに語られていました。文字の獲得は、子どもの世界を広げているのだと感じた瞬間でした。

しんのすけさんは、自分の名前以外ほとんどひらがなの読み書きはできませんでしたし、興味もあまりないようでした。でも、お母さんと毎日の宿題をしっかりとがんばり少しずつ文字を自分のものにしていきました。「お母さん、赤ちゃんをうむよ。」と楽しみにしていたしんのすけさんでしたが、そのお母さんが、7月に入院することになり、いつもいらっしやっただのお母さんがいないことでまた少し不安定なしんのすけさんがいました。

夏休みに入る前に、生活科で『お母さんの仕事』ということで、授業をしました。すると、書くことをいつも面倒そうにしているしんのすけさんが、入院しているお母さんを思い、お家でやっているお母さんの仕事を一つ一つ思い浮かべながら、それは一生懸命に書いていきました。「休み時間だからそれぐらいにしたら？」という私の声など聞こえないように「いい、書きたいもん。」と今までに見たしんのすけさんの字の中で最高に丁寧で心のこもった文字で書き続けました。そして、「お母さんに見せたいね。コピーしてあげようか？」と言うと、にこっとうれしそうに微笑んだしんのすけさんがいました。ふだん、お母さんのことなど口にしないしんのすけさんの真剣な姿を目の当たりにして、子どもたちにとって文字を学ぶということ、それは、心を伝える手段を得ることなのだ改めて学ばされました。コピーしたその紙をしんのすけさんは病院に「ひらがな修了証と一緒に届けたそうです。コピーを持って病院に行ったものの、その意味を気づかれていなかったお母さんを訪ね、しんのすけさんの様子をそのままお伝えすると「そんなことがあったんですか。全然知りませんでした。」と、「しんのすけはいじわるなんですよ。」と軽くおっしゃるお母さんが「そんなところがあるんですね。とても丁寧に書いてるなどは思ったんですけど。」と、うれしそうに涙を流されていました。

他にも、お友だちのノートを手にしても配ることができなかったゆうこさんが、文字の勉強を終えて当然のようににこやかにお手伝いをしてきている姿を見て、文字を通して広がる世界が確実にあることを感じます。「ひらがな」の授業を通して初めて文字と出会った子どもたちも、そうでない子どもたちも「知る」喜びと伝える喜びを文字を通して感じている、今年までそれに気づいていなかった私だったのだ・・・そう気付かされました。

足りなかったものは・・・

1学期のひらがなの学習の中で、子どもたちと、手をつなぎ、助け合い、一緒に学ぶという、とにかく楽しく様々な活動ができました。(今までは机について、ことばのやりとりだけのひらがな学習でしたので。)でも、一方では、もっと子どもたちの暮らしに入っていくって、子どもたちの家族に活躍してもらえる中身を創り出していく必要があったことを感じました。2組の和男さんのお母さんに協力していただいた「そ」の授業では、『和男さんが1年生で良かった。』と素直につぶやく子どもたちがいて、和男さんのお母さんと子どもたちをほんの少しではありますがつないでいくことができたのです。保育園の先生方がたくさん課題を何とか小学校につないでいこうとされたその成果として、一人ひ

りの課題はたくさんあるものの、子どもたちは、たくさんつながりを持っていました。隣の席の子や、一緒のクラスの子、さらに隣のクラスの子もとても気になり、意識する子がたくさんいて、無関心ではないが故に様々なトラブル・もめ事も起きながら、日々、成長していると感じていました。1学期に行った様々な活動(運動会も含む)を通じて、子どもたち同士が近づいた気はしながらも、もっとこの授業の中でも一人ひとりが生きる「ひらがな」の授業ができたのではなかったかと感じました。

おわりに

夏休みも終わりに近い8月21日、学年行事でお楽しみ会を行いました。おとなも子どもも一緒にゲームをして、仲良くなってということで、校内研修で教えていただいたゲームも取り入れさせていただきました。そこで、心も体も少しリラックスして、自己紹介や夕方からの焼肉会で大いに盛り上がる要素となりました。「ひらがな」の学習から次にはそこで学んだ文字を家族を見つめ自分を見つめそして表現していく次へのステップにしていくことが大きな課題でした。続けて行った生活科や国語の授業の中には、子どもたちと1字ずつ学んでいった文字が大きな力となりました。今、子どもと子ども、親さん同士、親と子ども、親さんと私、子どもと私・・・つなげて、つながっていくためにも、もっと子どものくらしに目を向け、子どもが元気になる授業づくりをしていきたいと思っています。

《資料》

- あ・・・いろいろな「あ」の言い方を言い合った後、粘土で長いひもを作り「あ」の字を書く。
- い・・・運動会もあるので、運動場をみんなできれいに石拾い。いしで「い」の字を何度も書く。「井先生の『い』だ。」の声に「いいね。」と応える。
- う・・・飼育小屋でうさぎと遊んだ後、「う」の勉強。うさぎに触れて満足そうな子どもたち。
- え・・・「え」を描こうということで、画用紙に絵を描く。真ん中に色紙をちぎり、「え」の字を完成させる。これは、手先の練習にもなる。
- お・・・折り紙をする。つるを教えると「おしえて。」「つくって。」と大変。苦手な子どもたちも他のできる子どもたちに教えられて様々な折り紙を完成させる。
- か・・・「かみをきる。」ということで、「か」の字を3つの画ごとに切らせる。(はさみの練習を前にしておく。4つの部屋を意識させて、形の良い「か」の字を完成させる。字の形を意識させるためには、大変有効。
- き・・・「かみをきる」の続き。
- く・・・大きな紙の裏に磁石でこっそり「く」の字を作っておく。「くぎ」をみんなに持たせて一人ずつ紙に貼っていく。24人で「く」の字が完成。裏をのぞいていく子や「せんせい、じしゃくをつけちよるっちゃろ。」などと言う鋭い子もいたが、「く」の字に歓声があがる。
- け・・・毛糸であやとりをした後、黒板でけいとで「け」の字を書く。いろいろな子どもたちとふれ合いながら遊べるのはいい。

- こ・・・氷をさわって、こおりを食べる。食べさせるつもりはなかったが、「食いたい」の大合唱に負けて。子どもの顔のカットを切り抜いていたので、それで「こ」の字の貼り、みんなで仕上げる。氷を食べたことの方が子どもにとっては印象的なようだった。
- さ・・・さいころを使って、すごろくゲーム。私対子どもたち、子どもたちの勝ちということで、大変盛り上がる。
- し・・・新聞をちぎり、まるめてしっぽの形にする。体育館でしっぽ取りゲーム。「し」の形を作ってみる。しっぽ取りゲームクラス対抗で、大いににぎあう。
- す・・・すもうの「す」隣とゆびずもう、腕ずもう。喜んで隣と手を握りあう。
- せ・・・背中を合わせて「せ」誰もいやがる子はいない。
- そ・・・かずおさんのお母さんの働いていらっしゃるそば屋さんを取材。そばをゆがいてみんなで食べる。「食いたい。」「おいしい。」「かずおくんが1年生で良かった。」のつぶやきあり。とにかく子どもにとって1番印象に残った字のようである。
- た・・・あきひこさんのお母さんからお借りしたたいわんの絵本を見せる。朝顔の「たね」を観察。「たね植え」
- ち・・・そばからで、そば茶をつくり、お茶を飲む。さっぱりした飲み口に「おいしい、おいしい。」の声。
- つ・・・積み木を積んで遊ぶ。1, 2組合同だったが、何人ずつかで協力して、とても上手に楽しくお城や乗り物、公園などを作る。
- て・・・手に絵の具を塗り、みんなで手の字を作る。楽しい「手」に大喜び。
- と・・・「とんぼ」の「と」で、竹とんぼを運動場で飛ばす。難しく飛ばせない子もいたが、とにかく大喜び。もっとしたいの声しきり。
- な・・・なぞなぞを出して答えてもらう。子どもたちにも考えて出してもらう。
- に・・・「につきをかこう」ということで、「絵日記」を描いてもらう。絵を描くことが苦手な子どもには、少しずつ関わりながら・・・。
- ぬ・・・子どもたちの好きなポケモンとセーラームーンの「ぬりえ」を「ぬる。」本の協力者も塗り絵の好きな子も大喜び。
- ね、れ、わ・・・「われね三きょうだい」ということで再び粘土を使って、似ているところ、違うところを確認して行く。
- の・・・のりを使って再び「の」の字を仕上げる。
- は・・・生活科を使って一日中「畑」づくり。「花」を植えて、「はっぱ」で遊ぶ。
- ひ・・・「ひこうき」の「ひ」で、紙飛行機作り。一つ教えるが、後は子どもたちが教えあう。体育館で紙飛行機とぼしっこ大会。いろんな工夫にもおどろき。
- ふ・・・プールで泳ぐ。紙ふうせん作り。
- へ、り・・・ヘリコプターのへ。紙を使ってヘリコプターのプロペラ遊び。体育館の二階から下へ向かってくるくる回る楽しさを味わう。
- ほ・・・星を切り取り、「ほ」の字を作る。
- ま、み・・・「みんなでまわってあそぼう」ということで、保育園で教えていただいた「なべなべそこぬけ」や「くるくるわごむ」をやる。みんなで手をつなぐことに抵抗のない子どもたち。本当に楽しそうだった。

- む・・・中庭で虫探し。狭い中庭にバッタやおおろぎ、たくさんの虫がいて驚く。
- め・・・めんこをつくる。遊んでいるが全く私たちはできず。教頭先生をお願いしてめんこの仕方を教えていただく。子どもたちから「教頭先生、すごい。」の声。
- も・・・「もしもし糸電話」糸電話を作る。糸電話を初めて使う子どもたちがほとんどで、うれしくてたまらずに休み時間もずっと続けてやる子どもたちが多くいました。
- や・・・「〇〇やさん」ということで、生活科で近くにあるお店屋さんをつくり、ごっこ遊びをする。それはそれは、楽しそうにそれぞれの発想でたくさんの品物を作り、売り買いをする。
- ゆ・・・「ゆらゆらゆれる」ということで、同僚の先生からいただいた「とんぼのおもちゃ」づくりをして、「ゆらゆらゆらす。」
- よ・・・よく見て書こう。と丁寧に「よ」の字を書く。
- ら・・・ベビースターラーメンで「ら」の字を書く。「おいしい。」「うれしい。」の連発。
- ろ、る・・・ろうそくで、「る」を書いておき、絵の具をぬると。あれあれ、「る」の字が浮かび上がってきた。「実はろうそくだよ。」と、教えてあげる。途中ちょっと失敗もあったが、子どもたちには大受け。
- ん、を・・・「だんごをつくる」学習のまとめで、団子作りに挑戦。みんなで協力して、おいしいだんごができる。

【実践事例 3】

くぐらせ期のかな指導

今年、8年ぶりに転勤した。久しぶりの1年生の10名の担任。

入学式の日、とても緊張しているが、学校を楽しみにやってくるのが感じられた。

翌日、登校してから何をするのか教えていったが、私の話が通じなくて、苦勞する。

「分からない」と助けを求めてくる子ども、話を聞かずに何もしていない子ども。

子どもたちの就学前の6年間の育った環境や経験を考えると、鉛筆とノートのみでの指導では難しいと思った。そこで、鉛筆を持って書く前に、その音にちなんだ活動を取り入れてひらがな指導を行うことにした。

〈たいしさんのこと〉

担任する際、たいしさんは、就学前に心配していたが、普通学級で見守ってほしいということになったということは聞いていた。とても人なつっこく、誰にでも話しかけてくる。ポケモンが好きで、色々な名前を挙げて話してきた。2つの園から来ている子どもたち、家庭保育の子どももいるが、誰とも仲良く遊んでいるし、上級生からも声をかけられ、一緒に遊んでいることも多い。生活面で、自分の言いたいことが伝わらずに、けんかになってしまうことも多かったが、すぐに仲直りをしていた。けれども、聞いたことに対して適切な答えが返って来ないこともあった。

たいしさんはひらがなの勉強を楽しみながら、取り組んでいた。たいしさんだけでなく、今の子どもたちにとって、くぐらせ期の取り組みが大切だと言われている。雑巾がしぼれない、ひもが結べない子どもたち。社会が便利になればなるほど、子どもにとって大切な経験ができにくくなっているように思う。10人という人数で、ともすればわたしがやってしまうほうが早くすむ。手を出すのを我慢しながら、時間はかかっても、ひとりひとりに経験させることを大切に、これからも過ごしていきたい。

《資料》

① かみちぎり

はさみを使わずに紙をちぎらせる。まっすぐな線や曲がった線。指の使い方がうまくいかず苦勞する子どもが多い。指先の使い方は、まだ不十分な子どもが多い。たいしさんも指先を使わずに、大きくちぎっている。きれいに線にそってちぎろうという感じではないので、作業も速い。でも速くできて、とてもうれしそうにしていた。指先を使うような経験が必要だと感じた。

② 「つ」と「し」

まずは、新聞紙をちぎって丸めてストッキングに入れてしっぽを作る。新聞紙を丸めるのも時間がかかる。たいしさんだけでなく、手や体を動かしたり、何かをしたりするということに対しては、みんな意欲的だった。

作ったしっぽを使って「つ」や「し」の形を作らせた。ぼくの「し」とにこにこ顔のたいしさん。鉛筆で書くときもわりとスムーズにかけていた。

その日の体育の時間にそれを使って、しっぽ取り鬼ごっこをする。みんなとても喜んで

鬼ごっこをする。鬼ごっこは最初にルールがのみこめず、ちょっといらいらした感じのた
いしさんだったが、時間がたつにつれて分かるようになって楽しくしていた。何事も経験
することの大切さを感じた。

③ 「の」と「り」

「の」と「り」の字をのりでなぞり、色紙をちぎってはっていった。色紙のちぎり方、
のりのはり方もまだまだ、つたない。でも、投げ出すことなく、ちぎったりはったりして
いた。

④ 「ら」

ベビースターラーメンを「ら」の形筆順通りに並べる。合格したら、筆順通りにそれを
食べる。しっかり集中して何度も挑戦する。筆順はしっかりできている。いつもより熱心
なのは食べ物だったからか、活動に「食べもの」をいれるのは効果的なようだ。「ら」は
ラーメンの「ら」は、他の字よりも意欲的だし、すぐに覚えていた。

【実践事例4】

「もしもし」の「も」 ～「ひらがな」の授業を通して～

第1学年 国語科学習指導案

1 単元名 ひらがなの指導「も」～「おばさんとおばあさん」より～

2 単元について

(1)はじめに

幼稚園、保育園に訪問させてもらうと、一つの活動を心ゆくまでじっくり取り組んでいる子どもたちの姿が印象的である。ところが、小学校に入学するやいなや、チャイムに区切られた生活が始まる。活動に取りかかり集中した頃にチャイム。もっとやりたいという声に「ごめんね、ここまで・・・。」ということもたびたびあり、10分の休みも、トイレや片づけに追われ、遊びに出ようとした頃にはチャイム。入学したての子どもたちにとって、学校はあわただしいところであろう。学習活動の中身も、椅子にきちんと座って頭だけ働かせる学習が毎時間つづくのであるなら、子どもたちは成長できない。1年生の1学期は、9年間の学校生活のスタートである。保・幼から、小学校への段差を緩やかにし、保・幼で育てられてきたものを大切に引き継ぎながら、子どもの側から見てどの子にとっても本当に楽しく力がつく授業とはどんな授業を作っていったらよいのか、1年担任をすることであらためて考えさせられる。

豊中市同和教育研究会から出されている「ひらがなの指導」に出会った。就学前の6年間の子どもの育った環境、体験はさまざまである。子どもたちはその中でことばを学び、生活経験を重ねてきた。しかし、子どもの背景にあるくらしによってことばや生活経験が誰もが同じように保障されてきたわけではない。体や心のしなやかさが保障されなかった。子どもにいきなり元気なおしゃべりや文字を書くことや積極的な遊び、ましてや自分の思いを出していくことを求めることは無理なことだ。すべての子どもが同じスタートラインに立っているわけではない。低学年の時にこそ、体を動かし、声を発し、お互いの体と体が触れあいながらしなやかな心と体をつくっていくことが大切ではないかと思うようになった。そして、それは、学級の中で心を開き、自分が自分のままで安心して過ごしていく素地となるものではないかと思う。そんな学級の中でこそ、ムラの子どもたち、被差別の側にいる子どもたちが、自分の思いを語っていけることにつながっていくのではないだろうか。

文字の指導を通して、入学までに通過してきたであろう道筋をもう一度みんなでくぐり、ていねいに心と体を開くことをしていきたい。また、その中で、できる限り子どもたちのくらしと重ねながら、お互いのくらしを知り合うことを大切にしていきたい。

(2)単元について

これまで国語科の学習では、教科書の単元の学習と並行して、文字の学習を進めてきている。この単元の学習も、同様に、「おばさんとおばあさん」の学習と「も」「ふ」のひらがなの文字学習を進めていく。

ひらがなの学習は、前述の通り、これまでの生活経験の差があることを前提にして、もう一度同じスタートラインに立つことから始め、体験活動を取り入れながらすすめていくものである。今回「も」「ふ」のひらがな学習を進めていくが、「も」では、友だちと関わりを持ち楽しく活動することを大切にしながら、また、「ふ」では、風船をふくらますことで「ふ」の口形をとらえさせ、ふわふわと

舞う風船遊びを取り入れてふんわりとした「ふ」のひらがなを体験しながら学習を進めていく。このような活動を通して、心と体をひらきながら、文字の獲得をめざしていくものである。

～中略～

(3) 児童の実態

ゆっくり成長している尚人。装具をつけ車いすで生活をしている章博。入学式の写真撮影の時、立ったり座ったりを繰り返した優樹。なかなか教室に入ろうとしない真紀。気持ちが一つのことに落ち着かない静代。ムラの子の恵美や和樹。クラスには私にさまざまな課題を提起してくれる子どもたちがいる。この子どもたちを中心にして、誰もが楽しく文字の学習に取り組み、文字の習得をしていってくれることを大切にしてきた。

真紀は、チャイムが鳴ってもなかなか教室に戻ってこようとしない。2階に行っていたので呼びに行くと迎えに来てくれるのを喜んでくれるかのように逃げることもあった。自分がしたいことを注意されると不満そうに悪口を言い返すこともある。元気のない自分に班の友だちが何も言ってくれなかったとあっかんべをしたこともあった。彼女にそんな行動をとらせているのは何か、二人で話をしてみると、“ともだちがたくさんほしい。でも、ともだちは私を大切に思ってくれない。”そんな思いを持っていることが分かってきた。(それは、私への“もっと私を見て”というメッセージでもある。)1の1では同じ保育園出身の子どもは3人でそのうち女の子は1人。友だちがほしいという気持ちは人一倍強い。入院した友だちに家で手紙を書いたり、友だちを誘って遊ぼうとしたりすることもあり、友だちに自分の存在を受け入れてもらいたいという思いの強さが伝わってくる。が、自分の思うとおりにならないときの感情の波が大きく、その感情に行動が大きく左右され、集団からはずれたり、トラブルになったりしてしまう。真紀がどんなときに大切にされていないと感じるかを話し込んだり、相手の思いを聞きながら、どうしてトラブルになってしまうのかを考えたりしていくことをこれからも積み重ねていきたい。

静代は、入学当初は、私に抱きつき離れないことがよくあった。床に座り込んで大声で泣き出すといくらわけを聞いてもただ泣くばかりで、なかなか心を開いて自分の思いを話してくれない。最近は元気よく大きな声を上げて遊ぶこともあるが、友だちを独占したい気持ちもしばしば見られる。学習中も一つのことに集中しきれず、周りの様子が気になって仕方がない。逆に、友だちの様子にはよく気がつき私に伝えに来ることが多い。静代の母と話していく中で、家でもテレビやゲームなどに関心を示さず、おうちの人たちと関わっていることが多いことなどから、静代は人への関心を強く持つことが分かってきた。そんな静代が学級の中で自分のままで安心して過ごせるようになってほしい。

この真紀や静代が、この文字学習を通して、友だちといっしょに活動することの楽しさを十分味わいながら、「も」のひらがなを習得して行ってほしい。そして、授業の中で、文字を学ぶことを積み重ねながら、自分の心を徐々に開き、学級の中で自分のままで安心して過ごせるようになってほしい。

～中略～

(4) 指導にあたって

○真紀や静代は「友だちとのつながりをつくりたい。」という思いは人一倍強い。そこで、友だちと協力しないとできない糸電話作りや友だちがいないとできない電話ごっこを授業の中に取り入れ、友だちといっしょに活動することの楽しさを十分味わわせたい。その中で「もしもし」の「も」の字を楽しく習得して行ってほしい。

○授業の中でくらしを出し合える場面をつくっていききたい。電話をかけた経験を出し合いながら、友だちのくらしを知り合う場面をつくる。また、その時はみんなの方を見てしっかりと伝えること、目を見てよく聞くことを大切にする。

○「も」の指導については、書き順、はらい、字形に留意しながら、丁寧に書くことを指導する。その際、既習の「し」の書き順を思い出させ、「も」の書き順も1画目は同じであることを押さえる。

○「も」のつくことばが出てきたら、なるべく実物を用意し、ことばと実物をつなげさせ、語いを増やしていく。

～後略～

5, 本時の学習

- (1) 目標
 - ・糸電話をつくり、電話ごっこをして、友だちと楽しく活動する。
 - ・「も」のつくことばを見つける。
 - ・「も」を正しく書く。

(2) 展開

時間	学習活動	予想される児童の反応		教師の支援(○は評価)	
5	1. 糸電話で教師と会話する。(代表の児童)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分もやってみたい。 ・なんて聞こえたか教えて ・「も」だ 	徹底 能動	<ul style="list-style-type: none"> ・代表の児童に「私が今から、この糸電話でお話しするから、返事をしてね。」と言っておく。 ・教師のことばを板書し(「もしもし、きこえる。')今日は、何の字を学習するか考えさせる。 	糸電話 「も」のカード
	2. 「もしもし」の「も」の字を学習することをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼくの名前の「も」だ。 ・早くしたいな。 			紙コッ
15	3. 糸電話を作って、友だちと電話ごっこをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・作り方を知る。 ・遊び方を知る。 ・作って遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・強く引っ張らない。 ・からまないように、気をつける。 ・大きな声を出さない。 		<ul style="list-style-type: none"> ・作り方を説明する時に、隣の友だちと協力して作る場面を示す。 ・「も」の字の学習なので、遊ぶ時は、「もしもし」を言ってから次のことばを伝えることを約束にする。 ・なかよく遊ぶには、どうしたらいいかを考えさせる。 ○協力して作り、なかよく遊べているか。 	プ・糸
5	4. 電話をした経験を出し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと遊ぶ約束をしたよ。 ・お母さんの仕事場に電話したよ。 ・私の名前だ。 	能動 徹底	<ul style="list-style-type: none"> ・くらしを出し合う場面では、みんなにはっきり伝えることと、目で聞くことを徹底させる。 	

5	5. 「も」のつくことばを集め、読む。	・もやし・もり・もも・もちなど			もやし など
15	6. 「も」の字を書く。 ・何の字に似ているか考 える。 ・書き順を知る。 ・字形を知る。 ・空書き ・プリントに書く。	・「し」だ。 ・「し」に横棒が2本ついで いる。 ・「し」が少し曲がっている。	徹底	<ul style="list-style-type: none"> ・となりどうしで考えさせる。 ・なるべく子どもの出してきたことばの実物を用意しておき、提示しながら、ことばと実物をつなげる。 ○「も」のつくことばを見つけたか。 ・「も」を見て気づいたことを出させる。 ・書き順は、「し」から書くことを押さえる。少し丸く書く。 ・もやしを絵カードにしたものを組み合わせて「も」の字を印象的に提示する。 ・ていねいに書くことを徹底させる。 	もやし カード
	7. 書けたら教師に見せる。		徹底	○「も」が正しく書けているか。	プリント